
もしも三億円当たったら

バロック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも三億円当たったら

【Nコード】

N8340H

【作者名】

バロック

【あらすじ】

部活帰りの桂木明良^{かつらぎあきよし}は偶然にもクラスメイトの鈴原美月^{すずはらみつき}に出会う。しかし、それがどうという訳でもなく……

放課後、部活を終えて一人夜道を歩いていると、不意に後ろから声をかけられた。

「そこにいるのは桂木君かつらぎじゃないですか！ これはすごい偶然ですね。部活帰りですか？ 実は私もなんです」

振り返った先にいたのはクラスメイトの鈴原美月すずはら みつきだった。

たしか吹奏楽部に所属しているとかなんとか。

それにしても、鈴原ってこんなにテンション高い奴だったかな？
ほとんど話したこと無いから分かん。

「そりゃあ、お互い大変だな」

なんとなしにそう返すと、彼女は「そうですね」と言った。
暗くて表情は分からないが、何となく楽しそうだった。

どうやら俺と鈴原は帰り道が同じらしく、しばらくの間二人で歩く事になりそうだ。まあ、それがどうと言うわけでもないんだが。

「桂木君。もしも宝くじで3億円当たったら何に使いますか？」

長い沈黙に耐え切れなくなったのか、鈴原がそんなことを聞いてきた。

俺の記憶が正しければ、この手の質問に決まった答えは無い。

貯金すると言うのが正解の場合もあるし、世界征服の為に使うと言うのが正解の場合もある。

ようするに、相手のツボを熟知していないと正解を導き出す事は不可能。

しかし、俺は鈴原の事を殆ど知らない。

結果、正解を言う事は不可能。

つまりは盛り上がらない。

ふーんそうなんだって感じになる事必須だ。

俺は考えた。どうにかしてこの試練を最高の形で切り抜けるナイ

すな方法を。

そして思いついた。

「悪いな鈴原。俺は生涯、博打には手を出さないことを固く誓っているから、それには答えられないんだ」

恥ずかしながら自分ではけっこうイケてると思っていた。

しかし、肝心の鈴原のリアクションは……

「ええ！ その回答はちよつと予想外です。桂木君は物事を固く考えすぎています。もっと軽い感じで考えてみてください」

「そうするよ」

つて！ これはいったいどういう状況だ！？

道德か！？

小学校以来やっていない道德の授業が、時を経て始まったのか！？

「簡単ですよ。自分の欲しい物を言えばいいです」

「へー。そうなんだー」

そんなくらい知つとるわ！

彼女は至極真面目だった。

俺の真面目な答えを待っていた。

もう、どうなつても知らないからな！

「えつと……まずは新しいスパイクが欲しい。それと免許は持っていないけど何となくバイクも欲しい。あとは適当にゲームでも買って、それでも余るだろうから残りは貯金だな」

「……他には無いんですか？」

「いや、もちろんあるよ」

なんであるって答えるんだよ俺！

何へんなプライド守り通そうとしてんの？

仕方が無い、とりあえず考えよう。

他に欲しい物……欲しい物……あった！

「あと、今週のジャンプとマガジンが欲しい。あ、そっぴや消しゴ

ム切らしてたな」

「それだけですか？」

「たぶん……」

なんか色々虚しかった。

沈黙する二人。

民家から聞こえてくる子供の笑い声。

俯いてしまった鈴原。

俺が悪いのだろうか？

つまらないことを言った俺が悪いのだろ
うか？

だとしたら不条理な話だ。

「私は……」

ようやく鈴原が顔を上げたその時、前方から来た車のヘッドライトによって周囲がパツと明るくなる。

俺は何となく彼女を見た。

その顔は真つ赤だった。

それはまるで……

「わ、わた、わたし、私はもしも3億円あったら。スパイクを買って、バイクを買って、ゲームを買って、それでそれで今週のジャンプとマガジンを買って、あと消しゴムを買って桂木君にプレゼントします。余ったお金も全部、桂木君にあげます。それくらい貴方のことが好きです。だから付き合ってください！」

ええええええええええ！

そんなのありかよ！

ちよ、いねどじりやう？

とりあえず宝くじ買えばいいのか？

夜道はまだまだ続いていた。

（後書き）

他のサイトで書いたものを大幅に推敲して投稿しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8340h/>

もしも三億円当たったら

2011年1月4日03時25分発行